

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24330185

研究課題名(和文) 宗教性/スピリチュアリティと精神的健康の関連 - 苦難への対処に関する実証的研究 -

研究課題名(英文) Relation between Religiosity/Spirituality and Mental Health: An Empirical Study of Hardships and Resilience

研究代表者

松島 公望 (MATSUSHIMA, Kobo)

東京大学・総合文化研究科・助教

研究者番号：40507927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本における宗教性/スピリチュアリティと精神的健康の関連について実証的に検討した。本プロジェクトでは、質的研究班(関西地区(阪神淡路大震災の被災地)チーム, 東北地区(東日本大震災の被災地)チーム), 数量的研究班(浄土真宗チーム, 5つの宗教教団(出雲大社教(神道), 立正佼成会, 曹洞宗, カトリック, プロテスタント)と一般日本人チーム)に分かれて, それぞれのチームごとに調査(フィールドワーク, インタビュー調査, 質問紙調査)を行った。各地域, 各宗教教団等の調査フィールドごとに違いがみられる側面もあったが, 本プロジェクトを通して, 宗教性/スピリチュアリティと精神的健康との間に関連にあることが示された。

研究成果の概要(英文)：We examined the relation between religiosity/spirituality and related mental health issues by carrying out two major empirical projects: (a) Qualitative Research Project in Kansai (the Great Hanshin Earthquake region) and Tohoku (Higashi Nihon Earthquake region) regions; and (b) Quantitative Research Project with Jodo Shinshu, Izumo Grand Shrine (Shinto), Rissho Kosei-kai, Sotoshu, Catholics, Protestants, and "Average Japanese." Each research project employed a variety of methodology (e.g., ethnography, in-depth interviews, questionnaires, etc.). While notable differences and variations are found across regions and religious organizations, we did find a robust relationship between religiosity/spirituality and mental health.

研究分野：社会科学

キーワード：宗教 宗教性 スピリチュアリティ 精神的健康 主観的幸福感 震災 喪失

1. 研究開始当初の背景

宗教性／スピリチュアリティが精神的健康に与える影響の大きさが様々な研究で示されている。しかし、これまでの多くの研究は、アメリカを中心としたユダヤ・キリスト教文化圏における研究であることから、これ以外の地域・文化の研究の重要性が示唆されている(Miller & Kelley, 2005)。

日本においても、1998年のWHOの健康の定義を受けて、宗教性／スピリチュアリティと精神的健康への関心は高まったが、決して大きな広がりを見せたわけではなく、この分野における実証的研究も決して多くはなかった(松島, 2010)。

そうした折、2011年3月11日、未曾有の大災害により多くの尊い命が失われた。非常に皮肉なことではあったのだが、この東日本大震災を機に、「ストレス関連成長(ストレス関連成長とは、緊張度合いの高い状況に遭遇することから生じる利益的(肯定的)な認識・変化と定義され、ストレスに対する防御因子であるとされている(Vaughn, Roesch & Aldridge, 2009))に関連する要因としての宗教性／スピリチュアリティの存在」や「宗教者によるメンタルケア」などが注目されるようになり、宗教性／スピリチュアリティと精神的健康に対する関心は徐々に広がりをみせていった。

そのような状況のなかで、2003年に設立された宗教心理学研究会を通して、宗教性／スピリチュアリティと精神的健康に関心を持つ研究者、宗教者が集うことになり、「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康に関する実証的研究」を幅広く行っていこうとの気運が高まっていった。さらに、先の大震災を通して、それぞれが積み上げてきた経験を活かしながら、この問題について協働して研究を行っていくことの重要性が再認識される機会となった。

そこで、宗教心理学研究会のネットワークを活用しながら、多くのフィールドを得て、宗教性／スピリチュアリティと精神的健康について実証的に検証する総合的なプロジェクトを構築したいと考えたのである。

2. 研究の目的

今回の研究プロジェクトでは、日本における宗教性／スピリチュアリティと精神的健康との関連について実証的に(調査データに基づいて)検討することを目的としている。

その目的を達成するために、質的研究班、数量的研究班の2つの班を設置することとした。各班の割り振りについては、各メンバーの専門領域、所属、研究関心等を考慮に入れて行った。その上で、班ごとに2つのチーム(1)質的研究班： 関西地区チーム、東北地区チーム。(2)数量的研究班： 浄土真宗チーム、5つの宗教教団と一般日本人チーム)を設置して、それぞれのチームごとに調査研究を進めていくこととした。

3. 研究の方法

(1)質的研究班

質的研究班では、主として「フィールドワーク」および「インタビュー調査」を行い、宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連について検討した。

関西地区チーム

関西地区チームでは、震災による喪失と宗教の関わりについて検討することを目的とした。その主な活動としては、阪神淡路大震災における被災地のフィールドワーク、慰霊法要に集う人びとへインタビュー調査、災害による喪失と宗教、精神的健康に関する文献レビューを行った。

東北地区チーム

東北地区チームでは、東日本震災で死亡した子どもへの「卒業証書」授与という事例の調査を通して、授与の実態を把握することを目的とした。その主な活動としては、宮城県内の東日本大震災において死亡または行方不明の幼児児童生徒のいる校舎の長への質問紙調査、その地域におけるフィールドワークを行った。

(2)数量的研究班

数量的研究班では、「質問紙調査」を行い、宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連について検討した。

浄土真宗チーム

浄土真宗チームでは、宗教性を用いた精神的健康予測モデルの有効性検討を主な目的とし、浄土真宗本願寺派僧侶を対象に質問紙調査を実施した(有効回答数 276名)。そして彼らの宗教性が精神的健康や主観的幸福感ならびに死生観や死別後の心理にどのように影響するのかを検討した。

5つの宗教教団と一般日本人チーム

5つの宗教教団と一般日本人チームでは、「出雲大社教(神道)」「立正佼成会」「曹洞宗」「カトリック」「プロテスタント」に関係する日本人(宗教者：宗教指導者・信者)および特定の信仰を有しない日本人(一般日本人)を調査対象とし、宗教性、スピリチュアリティ、主観的幸福感、宗教的自然観と精神的健康(こころの健やかさ)との関連を明らかにすることを目的とした質問紙調査(有効回答数：予備調査 199名、予備調査 30名。本調査 6,620名)を行った。

4. 研究成果

(1)質的研究班

関西地区チーム

1) 東北および関西における被災地でのフィールドワーク
東北でのフィールドワークでは、東日本大

震災で大きな被害を受けた宮城県本吉郡南三陸町と同石巻市立大川小学校を、また、仙台市若林区と名取市の沿岸部を視察した。関西でのフィールドワークでは、各地に点在する阪神淡路大震災の震災モニュメントを訪問し、特に神戸市長田区御蔵北公園において、今なお毎年地域住民と有志の僧侶が集い、ロウソク法要を行っていることが分かった。さらに2014年1月17日に、慰霊法要に参加し、実際の法要の進め方や参列者・主催者の様子等についてフィールドワークを行った。

2) 災害による喪失と宗教、精神的健康に関する文献レビュー

文献レビューを行った結果、信仰に基づく共同体があることや、宗教的な実践を行っていること、宗教的な信仰によって災害に意味をみだしていることが災害へのストレスへのポジティブな対処法となっていることが概ね示されているといえる。他方で、過去の体験を思い出してもらうことによる調査（回顧的な調査）が多く、宗教やスピリチュアリティの定義がそれぞれの研究によって異なっており、相互の関連も検討されていないことが課題としてみられた。

3) 慰霊法要に集う人びとへのインタビュー調査

インタビュー調査の結果、震災による喪失を経験した人々に対して、ろうそく法要という宗教儀礼は、「(死者を、遺族を、街を、震災を) 忘れない」ための文化的装置として機能していることが明らかとなった。その一方で、語り手によってその意味づけが異なること、また法要以外の様々な(宗教的・非宗教的) 関わりの中の「一つの」儀礼であることも同時に浮き彫りとなった。さらに、ここから「宗教儀礼 喪失後の適応」という単純な因果論で説明することが困難であることも示された。

東北地区チーム

調査の結果、非業の死を遂げた子どもに卒業証書を授与する行為は、例外ではなく広く行われていた。このことはこうした行為が普遍的な価値観を反映していることに他ならない。「死児の齢を数える」というように、死児のたましいが生者と同じ様に生活をし、年齢を重ねていくとする日本人のたましい観が、現代の学校教育の中でも生き続けているといえる。

(2) 数量的研究班

浄土真宗チーム

質問紙調査を行った結果、浄土真宗の信仰によって精神的な健康が得られ、そのことがストレスに遭遇してもポジティブに世界を再構築させ、死別経験後の心理的变化を肯定的にさせるとの仮説モデルの有効性が検証された。

浄土真宗僧侶の精神的健康や死別後の心理変化においては、信仰が大きな影響力を有

しており、信仰心が強い僧侶ほど、精神的に健康であり、死別後の心理もポジティブに変化することが明らかとなった。

さらに重要なことは、精神的に健康であるか否かにかかわらず、浄土真宗の信仰それ自体が死別後の肯定的変化を生じさせていることである。一方で、民俗宗教性である靈魂観念は、これとは正反対に、精神的健康や死別後の心理変化にネガティブな影響を及ぼすことが示された。

5つの宗教教団と一般日本人チーム

宗教性、スピリチュアリティ、精神的健康(主観的幸福感)に関する複数の尺度等(宗教観尺度(金児, 1997), 宗教イメージ尺度(松島・小林・酒井, 2013), キリスト教的宗教意識尺度(松島, 2011), スピリチュアル現象尺度(具志堅・松島・平子・徳野・相澤・酒井, 2013), 宗教的自然観に関する自由記述項目, 主観的幸福感尺度(伊藤・相良・池田・川浦, 2003), 精神的健康に関する自由記述項目, 個人の属性を問う項目)を用い、その関連について検討することで、これまで研究実績の乏しい宗教性/スピリチュアリティと精神的健康に関する実証的研究に新たな実績を作りだすことができた。

以下、今回の質問紙調査を通して、分析、検討した領域である。

- 1) 信仰の有無と信仰継承
- 2) 宗教/スピリチュアリティの実態把握
- 3) スピリチュアリティ/宗教性と精神的健康との関連
- 4) 片仮名表記における「スピリチュアリティ」の厄介さ:「科学と宗教」および「語源と語彙」の狭間で
- 5) 自己存在の在り方への気づき - 宗教的自然観の記述より -
- 6) 「こころの健やかさ」に関する調査的研究 - 自由記述による3宗教における一般信徒間での質的比較 -
- 7) 出雲大社信者・宗教指導者の「ご神徳」の感じ方
- 8) 立正佼成会における宗教イメージおよび主観的幸福感
- 9) 曹洞宗宗教指導者と信者の宗教意識 - 一般成人・大学生との比較から -
- 10) 寺檀関係と信仰
- 11) 「救いの体験」の有無による主観的幸福感の違い - キリスト教に関わる人びとを対象にして -
- 12) キリスト教に関わる人びとにとっての宗教/スピリチュアリティ - 有用性(役に立つ/役に立たない)における差異 -
- 13) 感想欄から見てきた日本人の信仰にまつわる様相 - 日本人クリスチャン(プロテスタント)を対象として -
- 14) 中学・高校生におけるスピリチュアル現象の違いについて - 公立学校、カトリック

系学校，プロテスタント系学校を対象にして -

- 15) 中学・高校生のキリスト教的宗教意識から見てくるもの
- 16) 学校現場と宗教：中高生におけるスピリチュアル現象とキリスト教的宗教意識は何を語るか

1)～6)については、「調査対象者全体」もしくは「複数の調査フィールドの比較」という両面の視点に立って論じている。7)～16)については、主として「それぞれの宗教教団，学校」を軸にして論じている。このように分けたのは，調査対象者全体から論じる視点，各宗教教団から論じる視点の両方が実証的宗教心理学的研究には必要であるとの考えがあったからである。

各宗教教団において「信仰の捉え方」が異なることから，そのあたりのことを丁寧におさえていかないとその研究自体が非常に煩雑なものになってしまう。しかし，そこだけにとどまってしまうと，どこまでも個別的な分析となってしまう，全体構造から理論的な枠組みを構築することができないという問題点も出てきてしまう。それらのバランスを取るためにも，全体から俯瞰的に検討していくアプローチも必要であると考え，今回のような構成で分析，検討を行ったのである。

(3)プロジェクト全体を通して

今回の科研費研究プロジェクトの大きな特徴としては，実証的宗教心理学的研究をベースとした上で，様々な分野，領域，立場の人びとが集ったということである。

心理学のなかでも，発達心理学，社会心理学，臨床心理学，学習心理学，実験心理学等の研究者が集った。心理学以外でも，宗教学，仏教学，歴史学，教育学，看護学等の研究分野，領域の研究者が集った。また，その立場も，大学の教員，研究員のみならず，宗教教団附属研究所・研究センターの研究員，さらには司祭（キリスト教），僧侶（仏教），布教師（神道）とそれぞれの宗教教団の宗教指導者も加わり，これら多彩なメンバーにより，本プロジェクトは構成されたのである。

このように，多彩なメンバーが集う研究プロジェクトは，それこそ，これまで至るところで企画・推進されていよう。本調査はそうした一面に加え，これまでに用いられることがほとんどなかった研究方法を根幹に据えている。すなわち，「実証的宗教心理学的研究（調査データに基づいて，宗教性／スピリチュアリティの実態，またそれらにまつわる，関連する事象を明らかにしていこうとの研究）」をベースとしたことである。これこそが，本プロジェクトにおける最大の特徴であり，これまで日本ではこのような総合プロジェクトは存在していないことから，本プロジェクトを通して，様々な新たな試みを行うことにより，これまで得ることができなかった研究成果を提供しようと考えたのである。

「実証的宗教心理学的研究をベースとする」との最大の特徴を形とし，日本における宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の実態を多角的な見地から明らかにしていくために，質的研究班，数量的研究班を設置し，さらに質的研究班では関西地区チーム，東北地区チーム，数量的研究班では浄土真宗チーム，5つの宗教教団と一般日本人チームを編成して，それぞれのチームごとに調査研究を進めていった。

2つの班，4つのチームでは，フィールドワーク，インタビュー調査，質問紙調査と質的研究および数量的研究の特性を活かしながら各調査フィールドに対して研究目的にかなったアプローチをとったことにより，多角的見地からの幅広い研究成果を提供することができたのではないかと考えている。

さらに，世界的にみても，宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の研究は欧米を中心としたユダヤ・キリスト教文化圏の研究が大半であったことから，それらとは文化が異なる日本における本プロジェクトの研究成果は非常に意義あるものであり，海外の研究者にも資するところ大であろうと考えている。

しかし，「日本における宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の実態について幅広く迫ることができた」「それぞれのアプローチに拠る複数の研究成果を提供することができた」との成果は，そのまま本プロジェクトにおける反省点，今後の課題でもある。

今回の研究プロジェクトにおいて「実態を幅広く」「複数の研究成果を提供」することができたかもしれないが，それらはチームごとの1つ1つの研究成果であり，研究プロジェクト全体としてどれだけ体系的なものを提供することができたのかとなると，本プロジェクトではそこまで至ることはできなかった。様々な分野，領域，立場の人びとが集い，総合的なプロジェクトを構築し，連携・協働のなかで活動を展開していくことができたが，今回の研究プロジェクトでは，チームごとの研究成果の提示にとどまってしまったのである。

日本における実証的宗教心理学的研究の分野では，これだけの規模の大きなプロジェクトを行っていくのは初めてであることから，まずプロジェクトメンバーがこれまで積み上げてきたものや関心のあるものなどを中心に幅広く試みていくことに重きを置いた。それは，メンバーそれぞれの独自性を重視するものであり，宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連について，新たな研究の可能性を切り拓くためであった。今回の研究プロジェクトでは，1つの系統だったものを作る，体系的なものを作るよりも，どこまでできたかわからないが，新たな研究の可能性を切り拓くことに重きを置くことにしたのである。

しかし，宗教性／スピリチュアリティと精

精神的健康の実態にさらに迫っていくためには「体系化」の作業は必ず必要となってくるであろう。この先も研究成果を積み上げていきながらも、どのように体系化していくことができるのかについても検討していきたいと考えている。

さらに、こうした一連の研究を通して、日本における宗教性/スピリチュアリティと精神的健康の実証的研究の礎を作っていきたいと考えているのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 24 件)

松島公望 企画者が行っている研究活動：宗教心理学研究会，科研費研究プロジェクト 日本発達心理学会第 26 回大会 2015.3.20 東京大学本郷キャンパス(東京都文京区)

浦田 悠 現代における聖地巡礼の多様な意味をめぐって 日本質的心理学会第 11 回大会 2014.10.9 松山大学(愛媛県松山市)

松島公望 研究プロジェクトの概要 日本宗教学会第 73 回学術大会 2014.9.14 同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市上京区)

西脇 良 宗教的自然観と精神的健康との関連 日本宗教学会第 73 回学術大会 2014.9.14 同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市上京区)

具志堅伸隆 スピリチュアル現象と精神的健康との関連 日本宗教学会第 73 回学術大会 2014.9.14 同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市上京区)

中尾将大 写経の実験的研究の試み 日本宗教学会第 73 回学術大会 2014.9.14 同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市上京区)

浦田 悠 宗教と災害による喪失および精神的健康との関連 日本心理学会第 78 回大会 2014.9.11 同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市上京区)

川島大輔 震災による喪失と宗教との関わり - 法要に集う人々の語りからの羅生門的接近 日本心理学会第 78 回大会 2014.9.11 同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市上京区)

中尾将大 日本における写経に関する実験的研究 - 宗教心理学における実験的研究の可能性 - 日本心理学会第 78 回大会 2014.9.11 同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市上京区)

河野由美・金児曉嗣 浄土真宗僧侶の宗教性が精神的健康と死別後の心理変化に与える影響 日本心理学会第 78 回大会 2014.9.10 同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市上京区)

松島公望・具志堅伸隆・平子泰弘・徳野崇行・相澤秀生・酒井克也 宗教性とスピリチュアリティとの関連：スピリチュアル現象にみる大学生の諸相(3) 日本発達心理学会第 25 回大会 2014.3.22 京都大学百周年時計台記念館・吉田南総合館(京都市左京区吉田本町)

西脇 良 宗教的自然観から精神的健康との関連への展開 日本発達心理学会第 25 回大会 2014.3.22 京都大学百周年時計台記念館・吉田南総合館(京都市左京区吉田本町)

具志堅伸隆 スピリチュアリティ的信念尺度からスピリチュアル現象尺度への展開 日本発達心理学会第 25 回大会 2014.3.22 京都大学百周年時計台記念館・吉田南総合館(京都市左京区吉田本町)

中尾将大 写経行動に関する実験的研究：理論から実証への展開 日本発達心理学会第 25 回大会 2014.3.22 京都大学百周年時計台記念館・吉田南総合館(京都市左京区吉田本町)

武田正文・川島大輔・浦田 悠 大震災からの復興における宗教の役割：18 年目の阪神淡路大震災被災地におけるフィールドワークから 日本仏教心理学会第 5 回学術大会 2013.12.15 武蔵野大学有明キャンパス(東京都江東区)

具志堅伸隆・松島公望・平子泰弘・徳野崇行・相澤秀生・酒井克也 宗教性/スピリチュアリティと精神的健康の関連：スピリチュアル現象にみる大学生の諸相(1) 日本社会心理学会第 54 回大会 2013.11.2 沖縄国際大学(沖縄県宜野湾市宜野湾)

松島公望・具志堅伸隆・平子泰弘・徳野崇行・相澤秀生・酒井克也 宗教性/スピリチュアリティと精神的健康の関連：スピリチュアル現象にみる大学生の諸相(2) 日本社会心理学会第 54 回大会 2013.11.2 沖縄国際大学(沖縄県宜野湾市宜野湾)

河野由美・渡部美穂子・金児曉嗣 死別後の主観的心理変化と精神的健康の関連 日本社会心理学会第 54 回大会 2013.11.2 沖縄国際大学(沖縄県宜野湾市宜野湾)

渡部美穂子・河野由美・金児曉嗣 死別経験の有無と死観が精神的健康に及ぼす影響 日本社会心理学会第 54 回大会 2013.11.2 沖縄国際大学(沖縄県宜野湾市宜野湾)

浦田 悠 質的研究班に関する報告 日本心理学会第 77 回大会 2013.9.21 札幌コンベンションセンター・札幌市産業振興センター(北海道札幌市白石区)

② 徳野崇行 数量的研究班に関する報告(1) 班活動全体の報告 日本心理学会第 77 回大会 2013.9.21 札幌コンベンションセンター・札幌市産業振興センター(北海道札幌市白石区)

② 具志堅伸隆 数量的研究班に関する報告(2) 予備調査データ分析報告 日本心理

学会第77回大会 2013.9.21 札幌コンベンションセンター・札幌市産業振興センター（北海道札幌市白石区）

②③河野由美・金児暁嗣 宗教性が死別後の主観的心理変化に与える影響 日本心理学会第77回大会 2013.9.20 札幌コンベンションセンター・札幌市産業振興センター（北海道札幌市白石区）

②④河野由美・金児暁嗣 諦観尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 日本グループ・ダイナミックス学会第60回大会 2013.7.15 北星学園大学（北海道札幌市厚別区）

〔その他〕

ホームページ等

宗教心理学研究会ホームページ：2012年度科学研究費補助金・研究プロジェクト

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松島 公望 (MATSUSHIMA, Kobo)
東京大学・大学院総合文化研究科・助教
研究者番号：40507927

(2) 研究分担者

金児 暁嗣 (KANEKO, Satoru)
相愛大学・学長
研究者番号：10047350

河野 由美 (KONO, Yumi)
幾中央大学・健康科学部・教授
研究者番号：10320938

西脇 良 (NISHIWAKI, Ryo)
南山大学・総合政策学部・教授
研究者番号：70387736

具志堅 伸隆 (GUSHIKEN, Nobutaka)
東亜大学・人間科学部・准教授
研究者番号：10449910

川島 大輔 (KAWASHIMA, Daisuke)
中京大学・心理学部・准教授
研究者番号：50455416

(3) 連携研究者

カルマノ ミカエル (CALMANO, Michael)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：60173994

渡部 美穂子 (WATABE, Mihoko)
相愛大学・人間発達学部・准教授
研究者番号：60382008

大村 哲夫 (OHMURA, Tetuo)

東北大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：30620281

丹野 義彦 (TANNO, Yoshihiko)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：60179926

石垣 琢磨 (ISHIGAKI, Takuma)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：70323920

(4) 研究協力者

浦田 悠 (URATA, Yu)
大阪大学・教育学習支援センター・特任講師

武田 正文 (TAKEDA, Masafumi)
浄土真宗本願寺派・高善寺・衆徒

中尾 将大 (NAKAO, Masahiro)
大阪大谷大学・人間社会学部・非常勤講師

酒井 克也 (SAKAI, Katsuya)
出雲大社和貴講社・講社長

小林 正樹 (KOBAYASHI, Masaki)
中央学術研究所・研究員

平子 泰弘 (HIRAKO, Yasuhiro)
曹洞宗総合研究センター・専任研究員

徳野 崇行 (TOKUNO, Takayuki)
駒澤大学・総合教育研究部・非常勤講師

相澤 秀生 (AIZAWA, Shuuki)
曹洞宗総合研究センター・特別研究員

TAKAHASHI, Masami
イリノイ州立ノースイースタン大学・心理学部・教授